

秋田県から北海道へ

氏名 近江 祥子

秋田県八峰町立八峰中学校 → 北海道函館市立亀田中学校
(期間：平成29年4月1日～平成31年3月31日)

1 秋田県の教育

○ キーワード①「問いを発する子どもの育成」

秋田県では、全教育活動を通じた最重点の教育課題として、「問いを発する子どもの育成」を掲げている。これは単に質問をするという意味ではなく、課題を自ら見つけ、言語活動を通して解決するプロセスをすべての教育活動で行うことを指している。そのため、授業においては適切な課題設定と解決への見通し、そして振り返りを重視し、各学校で取り組んでいる。課題や解決の手だてを教師が提示するのではなく、児童生徒から引き出す工夫は多くの学校で取り入れられている。

○ キーワード②「ふるさと教育」

秋田県では、ふるさと秋田の人材や職場を生かしたキャリア教育を推進している。県内のほとんどの中学校で地元の事業所を訪問する職場見学や、実際に働きながら働く人の思いに触れる職場体験を実施し、その成果を新聞にまとめたり発表したりする活動が行われている。また、小中6年間を見通したキャリア教育推進のために「キャリアノート」を全児童へ配布し、小学校卒業時には中学校へ、中学校卒業時には高校へノートを引き継いでいる。内容は職業観に限らず、現在の自分の興味関心や頑張りたいことなどを記し、キャリア選択の一助とできるようになっている。

2 学校や地域の特色ある教育活動

派遣元である秋田県八峰町立八峰中学校は、各学年約30人×2クラスの小規模校である。また、平成29年度に峰浜中と八森中が統合して開いた学校であり、町で唯一の中学校となった。

○ 地域の人材を生かした補充学習・受検期学習

八峰町には学習塾がなく、長期休みの学習は各家庭に任されているため不安の声も少ない。そこで、地域の人材（教員免許所有者及び塾講師経験者等）を講師に、塾形式で学習する機会（フォローアップスクール事業）を設けている。各長期休み10日間前後で、生徒は夏休みの課題や講師が作成した課題プリント等に取り組む。また、今年度からは1学期後半から週2回の3年生のための受検対策放課後学習も行っている。校区が拡大したため、スクールバスで登下校する生徒もいるが、その待ち時間を学習に当てることができ

るのである。もちろんスクールバスを利用しない生徒も参加しており、9割以上の生徒が参加している。教員免許所有者や塾講師経験者等の専任講師が指導してくれるため、教師はその間部活指導や校務等に専念することができる。昨年度からスタートしたこの事業(地域未来塾)は生徒や保護者から好評を得ており、そこで力をつけることで自信をもって受験に臨むことができたようであった。

○ ICT 環境

八峰町では平成23年度よりICT教育を推進している。すべての教室に大型電子黒板(88インチ)・コンピュータ・書画カメラ(実物投影機)を配置し、デジタル教科書もほぼ全ての教科で導入をしている。日常的にこれらのICTツールを活用するほか、平成28年度には、八峰中の3年生とベトナムとをグーグルハンアウト(無料コミュニケーションツール)でつなぎ、リアルタイムでコミュニケーションをしながら異文化交流をする授業を行った。消滅可能性都市が8割を占める秋田県の中でも、その影響を大きく受けるであろう八峰町において、ICTは他地域との教育格差をなくす契機となるものとして期待が大きい。

○ 自分の考えを発表するための工夫

「問いを発する子どもの育成」のために重要なのは、生徒が自分の考えを臆することなく発表できることである。言葉にするのが苦手な生徒のために、八峰中では「わかった人がパー、わからない人・自信がない人はグー」で意思表示をする挙手方法をとっている。教師が生徒の理解具合を把握できるため、それに応じて発問を変えることもでき、生徒も「わからない」という意志表示をすることができるため効果的だった。秋田県では、挙手方法だけでなく「話型」のモデルを教室に掲示して意見の広がりや共有をしている学校が少なくない。

3 私が取り組んできた実践

○ 発表をつなぐ道徳

道徳の時間は、読み物資料を中心として1年間行ってきた。道徳は、他教科と違って皆が意見をもつことができるので大切にしている。机間指導をしながら、価値に迫る考えの生徒には意図指名することもあるが、基本的には生徒が次の生徒を当てる指名制をとってきた。また、発表者のネームカードを貼り、似た意見の生徒や違う意見の生徒を可視化できるようにし、理由を掘り下げるなど「本音で語り合える」道徳の実践に努めた。発表まで至らなかった生徒の意見については、教室掲示の1つである道徳ボードにワークシートのコピーを掲示し、一時間の授業で終わらない道徳を目指した。

○ 双方向のコミュニケーションを意識したスピーチ活動(英語)

八峰町が所属する能代山本英語教育研究会では、昨年度の主題を「コミュニケーションへの意欲を引き出す活動の工夫」として研究を進めてきた。それを受け、私はスピーチ活動が一方向的な発表で終わらないよう、質問のパターンを用意してペアで行うQ&Aを継続して行った。するとスピーチの後に質問をする生徒が増え、双方向のコミュニケーションの場とすることが少しずつできるようになった。